

■今月の特選句

2014年1月号

悴みて崩し字うまくなりにはけり

下嶋四万歩

最近パソコンで書くから手書きの文字が下手になりました。その上に悴みては読めぬ。読めぬ字なら、書道展に出すしかありません。

鬼やんまごとく縄張り防空圏

酒井鹿洋

某大国が国をあげて防空圏を主張。やることに品性が無い。「お粗末な国」になりましたね。弱い日本人は赤とんぼで、大国は鬼やんまか。

三が日無形文化遺産食う

石川セツコ

消化吸収されない数の子を味付けして歯触りを楽しむなんてのは、外国人には分からんだろう。武士は食わねど高楊枝は見栄張り文化遺産だ。

一年の計の変更初仕事

伊地知寛

「君子豹変す」ですから、計画直後に変更になろうとも、なんら気にすることはない。一年の計の変更を、毎月やったらいいんです。

それまでは保つかと五年日記買ふ

有吉堅二

余命を短めに設定。長生きしたら儲かったと思うのも気分的にはいい。十年日記にして三年位で死ぬも良し。残りは家計簿に使われる。

二股大根沐浴のごと洗ひ

久我正明

沐浴というからには赤ちゃん大根か。二股だから語感から大ぶりの奴がいい。股の部分に黒土がついていたら洗い甲斐があるというもの。

■今月の秀逸句（・・・七七をつけてみました）

応援の声だけ投げる雪合戦

・・・霜やけなどにならずに済むか

栗倉健二

一つ顔もて幾たびの忘年会

・・・忘年会の梯子なんだろ

飯塚ひろし

ど根性南瓜包丁寄せつけず

・・・包丁の刃に恥をかかせて

横山喜三郎

先客の猫に挨拶寒炬燵

・・・猫は先輩面をするから

氏家頼一

長き夜のパソコン検索依存症

・・・広くて浅きもの知り爺

笠 政人

熱帯の誰も走らぬ師走かな

・・・日本人だと即刻露見

金澤 健

転ぶかと思いつ転ぶ雪の朝

・・・サプライズなき人生じゃんか

小泉花子

風邪ひいて馬鹿にあらずと認めらる

・・・例外もあり馬鹿も風邪ひく

高橋素子

大根をならべ足湯のかけながし

・・・時に牛蒡の混じりてをりぬ

小林英昭

腕組とふところ手との立話

・・・互いの違い言ひ争ふや

加藤 賢

全山に火の手を挙げて紅葉山

・・・火事のなかでも楽しい部類

田中早苗

重鎮が居て窮屈な忘年会

・・・無礼講には出来ないんだね

山本 賜

もしかして只の腕組み懐手

・・・手に拳銃があればドラマに

白井道義

■今月の滑稽句

【佳作】	野良猫ののさばっている日向ぼこ 正直に己に適う熊手買う 煤払い八十路のばばがしゃしゃり出る	青木輝子 青木輝子 青木輝子
【佳作】	ひさびさに頂戴したる草虱 鷺鳥の右顧左眊して秋暮るる 予想外いちよう落葉の弾力は	青山桂一 青山桂一 青山桂一
【佳作】	積ん読の短き秋を惜しみけり 生きるとは忙しきことよ文化祭 銀杏もみぢ地に還るのは吾も亦	秋月裕子 秋月裕子 秋月裕子
【佳作】	振り返る馬のたてがみ大旦 瀬戸の島ところかまわず蜜柑山 願ひ事とっさに増やす初詣	有富洋二 有富洋二 有富洋二
【佳作】	忙しいふりしてゐます十二月 生も死も同じひと文字ふくと汁	有吉堅二 有吉堅二
【佳作】	お利口になれない子には雪が降り 年明けて大きくなったと子に撫でられ	粟倉健二 粟倉健二
【佳作】	短日やタマに留守居を頼みたる 灼熱の恋に落ちたる雪女	飯塚ひろし 飯塚ひろし
【佳作】	餅膨れ裂けてすぼんで食べごろよ 三步ほど歩き確かめブーツ買ふ 蛸足に愛され外すちやんちゃんこ	井口夏子 井口夏子 井口夏子
【佳作】	老いらくの友は酒杖己が影 肥満ペット喪家の野良をうらやむや	池田亮二 池田亮二
【佳作】	別れるほど強くは吹かぬ隙間風	石川セツコ
【佳作】	冬晴やビルの谷底富士見坂 門松も国旗もたてず臺がたち	伊地知寛 伊地知寛
【佳作】	飛びますと雀申せり敷松葉 新品の古城碑ありて小六月 綿虫にその体重を聞いてみる	伊藤浩睦 伊藤浩睦 伊藤浩睦
【佳作】	中年やまづはキャベツに箸進め	稲沢進一

	会へばまたいつしか別れ秋深し 三日はや体重計を素通りす	稲沢進一 稲沢進一
【佳作】	手に御煎舅居眠り日向ぼこ 風まかせままよと落葉旅立ちぬ さつま汁レディースランチお替りす	井野ひろみ 井野ひろみ 井野ひろみ
【佳作】	右傾化を好む近頃枯れすすき 食の秋続けたカレー加齢臭 滑稽の句会の宴笑い茸	入江澄泉 入江澄泉 入江澄泉
【佳作】	赤トンボ空のどこかへはじけ飛び おぞうすいお粥に醤油で味つけし うちの猫心の火事の消防士	上山美穂 上山美穂 上山美穂
【佳作】	凧や千手仏には千の風 男体と女体の睦む初筑波	氏家頼一 氏家頼一
【佳作】	箸先に運と不運の盲汁 着ぶくれてこの世が眠くなりてをり 昭和一桁可も不可もなく懐手	越前春生 越前春生 越前春生
【佳作】	冬の鴟まだ出る声を絞り出し 散りさうで散らぬ一徹冬薔薇 冬の蠅死すべき道理見当らず	奥脇弘久 奥脇弘久 奥脇弘久
【佳作】	吹溜る桜落葉のダンスかな 食りて蜜柑のいろに染まりけり	笠 政人 笠 政人
【佳作】	菊作り奥方はいと愛想よき 会積さる帽を目深にマスクして	加藤 賢 加藤 賢
【佳作】	新米の届く嬉しさ神棚へ 新藁を果樹に敷き詰め一休み 新米食うカレーライスかバラ寿司か	門屋 定 門屋 定 門屋 定
【佳作】	ひたすらに祈る人あり神の留守 立冬に生まれし我や脇甘く	金澤 健 金澤 健
【佳作】	腰のばし老いらくの恋小春かな 夫の命日紋付鳥が挨拶に 蓮の実の孔いくつかはハート型	川島智子 川島智子 川島智子
【佳作】	人の世もひともしも色々(いろいろ)落葉掃く	菅野あたる

	湯上りのお湯割りもまた柚子湯の香 冬ごもり鉄扉の下に犬の鼻	菅野あたる 菅野あたる
【佳作】	大根の毛深きところ隠す土 大根や立つことだけの役どころ	久我正明 久我正明
【佳作】	日向ぼこ鉢盾なくてほこほこと 山茶花の街宣カーに散らさるる 日向ぼこ猫も私もふくらんで	工藤泰子 工藤泰子 工藤泰子
【佳作】	寸足らず今に見てゐろ熟し柿 暮近しされど暇ん(肥満)です入院中	黒田忠一 黒田忠一
【佳作】	煩惱の百九は有り除夜の鐘 飼い主とお揃いセーターブルドッグ	小泉花子 小泉花子
【佳作】	コガラシヤミンナカイケツスグカヘレ 闇汁にうらみつらみの味したり	小林英昭 小林英昭
【佳作】	雪女嫌われ役の顔なじみ 雪が降る嬉ぶ人と困る人 食偽装グルメ時代の落とし穴	齋藤八兵衛 齋藤八兵衛 齋藤八兵衛
【佳作】	日展も金にまみれて文化の日 秘め事を空白として日記果つ	酒井鹿洋 酒井鹿洋
【佳作】	秋の陽に紅蓮の炎紅葉山 神の御饌(みけ)直会(なおらい)殿に神在(ま)さず 落鮎料理食ぶ骨煎餅目当也	佐野萬里子 佐野萬里子 佐野萬里子
【佳作】	タレント屋雨後のたけのこ紅葉枯れ 午笑ふ未だ九十才の野老(ところ)かな 隠し酒濁酒といふ字に酔わされて	柴田止揚 柴田止揚 柴田止揚
	林檎食ぶ歯の浮くやうな世辞を言ひ 枯れきって隠し事なき枯野かな	下嶋四万歩 下嶋四万歩
【佳作】	縄のれん木枯に背を押されけり 冬帽子似合ひますよと買はされぬ からっ風吹くは昼より義理堅し	壽命秀次 壽命秀次 壽命秀次
【佳作】	空元気出して気合ひや大根引く 脇に置く喪中のはがき賀状書く	白井道義 白井道義

【佳作】	行きも帰りも女郎蜘蛛に見られてる 青空に女郎蜘蛛心奪われそう 私の虜にしてしまおう女郎蜘蛛	鈴木和枝 鈴木和枝 鈴木和枝
【佳作】	鍋物をおつとめ品の食材で 冬ざれや食後デザートケーキ食べ 冬籠このまま見たい作品さ	鈴木哲也 鈴木哲也 鈴木哲也
【佳作】	埴輪なら口開けるだけ雪の声 煙突も無いマンションにサンタ来る マドンナの声もとし取る初電話	高田敏男 高田敏男 高田敏男
【佳作】	戦争を知らぬ子なれどそぞろ寒 城壁の石垣へくそかづらのみ 狐火や年齢詐称おてのもの	高橋きのこ 高橋きのこ 高橋きのこ
【佳作】	マスクと帽子で見た目芸能人 節電を一休みしてクリスマス 忘年会ビンゴゲームに勝負かけ	高橋マキコ 高橋マキコ 高橋マキコ
【佳作】	地下道の長きを歩き日短か 紅葉狩りとなりたる裸足参りかな	高橋素子 高橋素子
【佳作】	目を覚ましついおはやうと日向ぼこ みちのくの便りをくれし雪女 影もまたお化のやうに日脚伸ぶ	田中章子 田中章子 田中章子
【佳作】	木枯や釜ヶ崎の地獄はじめ 飛鳥より小春日を堪能したる 小春日や飛鳥大仏を見詰める	田中 勇 田中 勇 田中 勇
【佳作】	千歳飴大人七人引き連れて ひれ酒や大虎小虎ぞろぞろと	田中早苗 田中早苗
【佳作】	がたがたの歯にしみとほる新走 ほつとする便座の温み冬に入る 貧乏神旅立つ予定なかりけり	田村米生 田村米生 田村米生
【佳作】	裏のごみ片付かぬまま年の暮 年ごとに簡略目立つおせちかな 長生きを念じて食べる大根炊き	津田このみ 津田このみ 津田このみ
【佳作】	ほめられて得意顔する冬の月 冬晴れに予防注射やスカイツリー	土屋泰山 土屋泰山

	冬の朝ストーブ点けてたればんだ	土屋泰山
【佳作】	煤けたる神棚メリークリスマス 不揃いなラインダンスや掛大根 焼芋と六十年目の和解かな	都吐夢 都吐夢 都吐夢
【佳作】	親指が小指を擦る寒さかな 黙祷の後乾杯や敬老日 離れ住む人呼び寄せる年忘れ	飛田正勝 飛田正勝 飛田正勝
【佳作】	雲間より出づるまで待つ初日影 偏窟の窟にこもりて寝正月 実千両役者気取りの男きて	永島董玉 永島董玉 永島董玉
【佳作】	門松の三兄弟のたけくらべ いっせいに謹賀新年初ライン 伊勢海老に嫌疑がかかり赤くなる	西をさむ 西をさむ 西をさむ
【佳作】	子が屠蘇を堂々と飲む年となり 初日の出のよう新品の松山城 お雑煮は普段と違う父の味	花岡直樹 花岡直樹 花岡直樹
【佳作】	煤払たちまちもどる煤のかず マニキュアの仕上白息吹きかけて 焼芋売心うごくも遣り過ぎす	原田 曄 原田 曄 原田 曄
【佳作】	煤逃げの一網打尽捕へらる 山眠る我が家の山の神も亦 現行の催促届く煤逃げに	ひがし愛 ひがし愛 ひがし愛
【佳作】	出払ひて一人天下の炬燵かな 屋根鴉一声御慶申しけり スッピンを隠してくれるマスクかな	久松久子 久松久子 久松久子
【佳作】	繕ひの針の冷たし夜の更ける 短日を準備不足の言訳に 米菓食む音散紅葉踏む音は	日根野聖子 日根野聖子 日根野聖子
【佳作】	極月や練り生き活きの脳の味噌 湯婆のダブルベッドに寡夫かな 狼や汽煙D51雪を分く	藤岡蒼樹 藤岡蒼樹 藤岡蒼樹
	七五三きやり一ぱみゆばみゆみたいなの 七五三我慢しなくていいんだよ	藤森荘吉 藤森荘吉

- | | | |
|------|------------------|-------|
| 【佳作】 | 七五三本当はサッカーしたいのに | 藤森荘吉 |
| | 昼の月紅葉並木を見下ろせり | 藤原セツ子 |
| | 根気よきかな今日もまた木の葉散る | 藤原セツ子 |
| 【佳作】 | 桜紅葉やオーヘンリーのごと一葉 | 藤原セツ子 |
| 【佳作】 | 松茸の香に目を閉じる土瓶蒸 | 松井寿子 |
| | 大布団近づく前線迎え討つ | 松井寿子 |
| | 侘び住まひ花柎を散らしつつ | 松井寿子 |
| 【佳作】 | つい舐めてしまふ唇空っ風 | 松井まさし |
| | 顔見知りの猫知らんぷり年の暮 | 松井まさし |
| | 初夢のわが恋をわれ嘲笑す | 松井まさし |
| | 仲間しか知らぬ魚に熊の顔 | 松尾軍治 |
| | セーターの似合ふ男は助こまし | 松尾軍治 |
| 【佳作】 | 三角も四角も丸もおでんかな | 松尾軍治 |
| | 天安門炎えて天下の秋を知る | 丸山絃一 |
| 【佳作】 | ブラックも茹でれば赤し秋の暮 | 丸山絃一 |
| | 年玉のベアを迫らるアベ効果 | 丸山絃一 |
| 【佳作】 | 切り株にタバコ吸う真似木の実ふる | 三橋百笑 |
| | どんぐりを踏めばプチりとぷち怒る | 三橋百笑 |
| | ジェット雲高き天をほしいまま | 三橋百笑 |
| | 恋の道杓子定規じや花咲かぬ | 宮森 輝 |
| 【佳作】 | 老いぼれの静脈のごと枯木立 | 宮森 輝 |
| | 忘れじょうよくなる齡忘年会 | 宮森 輝 |
| | 鯛焼の今日の気分は頭から | 百千草 |
| | 雪起し見栄切るやうに馳せ参ず | 百千草 |
| 【佳作】 | 水っ凍売の極意を説く人の | 百千草 |
| | 気象は近寄りがたい北風の者 | 森岡香代子 |
| 【佳作】 | 神様の夫婦喧嘩や玉霰 | 森岡香代子 |
| | 冬眠の株券肥えるアベノミクス | 森岡香代子 |
| | 来る度に今年が一番寒い冬 | 森 要 |
| | 外は雪猫背炬燵で丸くなり | 森 要 |
| 【佳作】 | 厳寒で手足も出せぬ雪だるま | 森 要 |
| 【佳作】 | 隙間より噂洩れ入る耳袋 | 八木 健 |
| | 着膨れに攻撃精神失ひぬ | 八木 健 |

	口すぼめ風呂ふき大根の語源説く	八木 健
	二三の日や勤労感謝してみたり 二合酒ちびり勤労感謝の日	八洲忙閑 八洲忙閑 八洲忙閑
【佳作】	ネクタイ労働勤労感謝の日	
	障子貼り夫は妻を慕ひつつ 部屋の隅グラビアめくり息白し	柳 紅生 柳 紅生 柳 紅生
【佳作】	日向ぼこ窓際を過ぎ窓の外	
	ニャオーニャオと猫とおしゃべり暖炉前 姿見に吾も干柿なりしかな 意気揚々捕える野ねずみ吾が子猫	柳澤京子 柳澤京子 柳澤京子
【佳作】	紅葉手に思い寄せつつ散歩道 お守りとなりて降り来る紅葉かな 白鷺の化粧直しや城の秋	山下正純 山下正純 山下正純
	大きすぎ出荷できないみかん届く 三面鏡でラジオ体操冬の朝 式部の実色付きぼろぼろ落ちたがる	山本けい子 山本けい子 山本けい子
【佳作】	手伝をしたがる幼な障子貼り この人の特技は牡蛎のはやすすり	山本 賜 山本 賜
	疾風にまかせっきりの落葉搔 究極の愛蝻螂の身を捧ぐ	横山喜三郎 横山喜三郎
【佳作】	三島忌や何となく世はキナ臭き いにしへの謎解けて来し冬の虹 大仰に歯牙抜かれをり冬の鴟	渡辺さだを 渡辺さだを 渡辺さだを